

特定非営利活動法人 太平洋戦史館

戦史館だより

2015年12月20日発行
 戦史館事務局〒029-4427
 岩手県奥州市衣川区陣場
 下41 齋オフィス花岡
 編集発行人 花岡千賀子

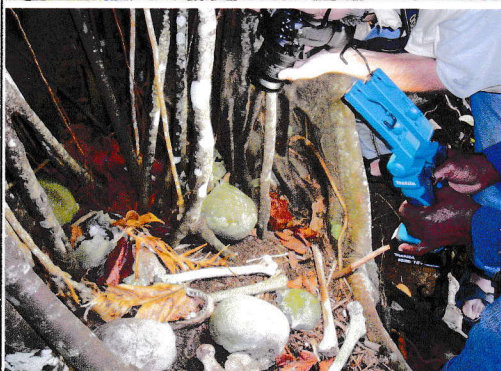
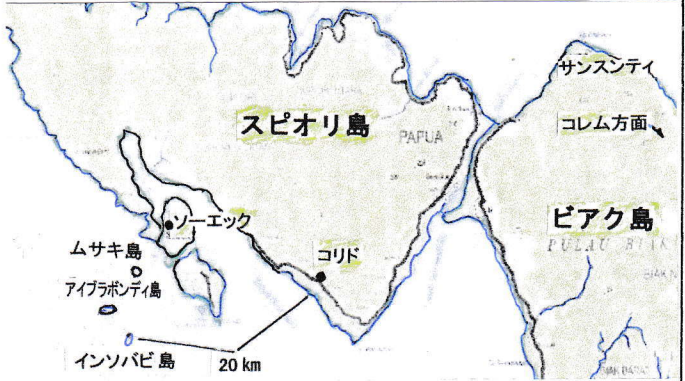
会長理事 岩渕 宣輝 専務理事 大瀧 久治 ☎0197-52-3000 FAX 0197-52-4575

またも遺骨帰還ゼロ柱 日本大使館外交放棄か？

前号の戦史館だよりに、スピオリ島方面へ遺骨帰還応急派遣団が出発…と書きましたが発送する直前に事件が発生しました。ジャカルタで待ったがかかり、遺骸の収容と帰還が延期に、日程を繰り上げて帰国するというのです。できあがった紙面に「ビアク・スピオリ方面窓口と大使館の意思疎通が不十分で、遺骨帰還延期。新たな日程は未定。次の会報で詳細をお知らせします。」と、取りあえず数行の紙片をはさみ入れたのでした。

厚労省は遺骨帰還できなかった理由をメールで「インドネシア政府の都合により御遺骨の収容ができないため…」と書いてきましたが、いかにもお役所らしい…。最大の原因はジャカルタの日本大使館が、スピオリ市には口上書の挨拶も公文書による遺骸収容の協力要請も一切せずに、何を血迷ったか隣のビアク市へ依頼の文書を送っていたのです。その交渉相手は、カタコトの日本語を話すビアク市役所観光課の古参職員。

スピオリ市はかつてビアクの一部でしたが、中央政府が、パプア独立運動の対策として自治権を与えたことで10年以上前にビアクから分離独立した市です。今回スピオリ市からの帰還は初めてのことで、戦史館では念入りに準備を重ね、アイブラボンディ島とヌサキ島



から発見された遺骸概数は120柱と想定していました。スピオリ市は市長選の最中でトップが不在なので、代行の警察署長への根回し、保安対策などをお願いしたり、一方、日本から持参したレトルトカレーを島の皆で食ながら遺骨帰還への理解と協力を積み上げてきました。

アイブラボンディ島、古い井戸から発見された40柱の遺骸。最初は「骨を島の外に持ち出すと嵐がおきる」と反対した島民も、浜辺に打ち上げられた日本兵の遺骸だとわかり、村人総出で死者に祈りをささげ、掘り出す作業や仮安置所の整備にも協力していただきました。

無人島のムサキ島は堆積した土砂の中から遺留品と共に50体の遺骸が発見されていました。嵐で半数が流出してしまったので緊急の収容と仮安置をお願いしました。その後も、海岸近くの林の中から、続々と姿を現す遺骸成長の早い熱帯の木の根に挟まれ、身動き取れない遺骸

その根をゆるめて全身を取り出したり、眼窩を突き抜ける木の根を切ったり、地主さんらの応援で、民間ができる力すべてを出し切って、遺骸収容の準備を進めていました。

…にもかかわらず、大使館はスピオリ市でなく、全然関係ないビアク市観光課職員に連絡し続け、ありえない要求を突きつけられていました。「ビアクで儀式をすべきだ。日本での姉妹都市捜しはどうなった？ ビアクで火葬はさせない。日本は何もしてくれない！」

大使館では長年、前任者から引き継いだ通り、連絡先はビアクの癒着した相手だけ、秘書任せだったので、岩渕がスピオリ市のキーパーソンと直接連絡できる携帯番号を伝えていたのですが無駄でした。ちなみに大使館関係者から聞いた笑い話「パプアと聞くと半分がそっぽを向くが、イワブチの名前が出ると全員がそっぽを向く」というのがあります。辺境パプアにはなるべく関わらないよう、岩渕とは決して関わるなというたとえとか。

会長理事岩渕は2013年夏、外務大臣表彰をいただき、その表彰理由は「岩渕氏は1990年より第二次世界大戦激戦地であったインドネシア・パプア地域において、我が国政府の遺骨帰還事業に協力された。首都から離れ、また分離独立運動により、入域困難な同地域において、現地関係者との友好協力関係を築くとともに、未送還遺骨調査等に長年にわたり粘り強く取り組まれ、約1100柱の遺骨帰還を実現されるとともに、日本とインドネシアとの相互理解促進に貢献された」と、表彰者紹介の冊子に書いていただきました。こうして見ていてくれる人がいるのだなあ…と大感激したのですが。道のりは険しく遠い。

遺骨帰還延期の話に戻ります。ビアク市観光課職員は、日本大使館への要求だけでなくインドネシア中央政府へ「スピオリから遺骨帰還をする前に、もっとビアクと協議を重ねるべきだ」と主張。パプアの問題に手を焼く教育文化省は、パプア州で部族間闘争になっては困ると、遺骨帰還を延期させる手段に出ました。大使館公使は「戦後70年の年、何とか理解と協力をお願いしたい」とインドネシア中央政府に申し入れたようですが、敗北。

民間がどんなに頑張っても、その足を引っ張る外務省。面倒な問題に関わりたくないインドネシア中央政府、ゼロ柱帰還をインドネシアの事情で…と言い訳したい厚労省…。

派遣団は教育文化省の考古学者から「島には甕(か)の中に埋葬する習慣があるので事前調査が必要。スピオリには行かないように」と言われてしまいました。「では一緒に収容現場に立ち会い、法医学者の鑑定前に見てください」とお願いしたのですが、考古学者は調査に行かず、教育文化省トップはパプア行きをキャンセルし、代わりにパプアへ入る派遣団に外務省を同行させて、派遣団の動きを見張って不穏な動きがないかどうか報告するように指示を出しました。外務省から指示された現地の警備責任者は、派遣団が滞在しているホテルにやって来て「外務省から派遣団を見張るように言われているが、ジョコとイワブチがいる限り心配していない。長いつきあいだから分かると言っておいた。むしろ外務省っていうのは相手国とのジンバタン（架け橋の意味）が役目じゃないのか？」と。

考古学者の話が出ると、かつて「50年インドネシアの地に留まっているものはインドネシアの“文化財”なので持ち出し禁止」という国内法を日本兵の遺骨にも適用しようとしたことを思い出します。インドネシアと日本の間で、遺骨帰還に関する覚書が締結された

のは2013年11月。締結前の数年間は、遺骨帰還の日程が組まれても「合意書が締結されるまでは認められない」とインドネシア政府は延期の連続。遺骨は文化財か？という論争が続き、その結果2012年3月の政府派遣はビアクからゼロ柱帰還となってしまいました。

さすがにこの事態に両国の関係省庁が真剣に取り組み「遺骨収容は人道上の問題なので考古学の対象ではない」という教育文化大臣の見解で決着していました。今回もまた別人のような、新しい問題のような顔をして、同じような方法が繰り返されています。2年前の覚書に崇高にも書かれている、両国民の友好、協力、人道、平等、相互理解に向けて、粘り強く解決いくはずだったのですが。

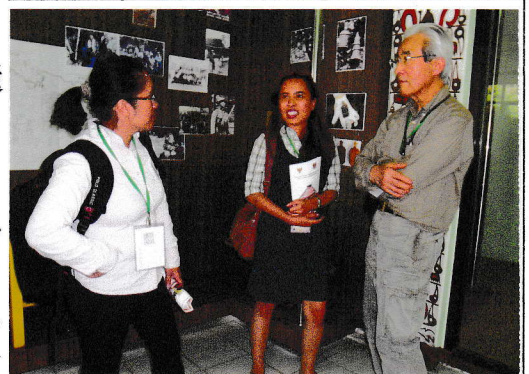
戦後70年の年なのに、大使館は遺骨帰還ゼロ柱という残念な結果で締めくくりました。

何とか名誉を挽回してもらいたい…と大使館担当者に「1月に、岩渕と一緒にスピオリへ行って、先日のお詫びをして再度交渉し、出直しましょう」と呼びかけてみたのですが、外務省・厚労省からは「インドネシア中央政府は、覚書の締結から2年経過したので、ふりかえりをしたいと言っています。今はパプア州へいくことはできません。戦史館の未送還情報収集事業でもパプア州へ行かないでください。」と回答してきました。

11月の第4次未送還情報収集派遣では、年度計画で、ジャヤプラ近郊のプアイ村からの遺骨帰還が予定されているのでその準備に入りました。

プアイ村ではセンタニ湖の水位が下がり、湖底の一部が露出している機会に水道管を埋設する土木工事が進んでいます。その工事で新たな遺骸が発見されています。

またジャヤプラのチャンドラワシ大学で、研究者や学生たちに遺骨帰還の意義について話しをする機会を持ちました。死者の人権について、危険物の除去について、避戦の決意について解説し、理解を得ることが遺骨帰還への一番の早道。写真とパネルを展示したコーナーで、日本兵遺骸の情報提供を呼びかけました。



未送還情報収集事業は 今年度2016年3月31日で終了

となります。しかし翌年度以降の遺骨帰還事業の見通しはまったく不明だそうです。厚労省は当初、新たに設立される指定法人に全戦域の調査が引き継がれると期待をよせて組織体制を組んでいたようですが、超党派国会議員による「戦没者遺骨収集推進法案」はいまだ成立していません。しかし、お役所の組織体制や思惑とは別に、戦史館では、やりかけのスピオリ方面からの遺骨帰還、年頭に計画されていたプアイ村からの遺骨帰還を要求し続けましょう。

9月に戦争のための法律が強行採決されてしまいましたが、今、私たちにできる精一杯の『避戦』活動は続きます。2016年は戦後71年。いつまでも戦後であり続けるために遺骨帰還の活動は、死者の人権を守るために、危険物を除去して二次被害を防ぐために、若者が再び戦場に駆り出されない送り出さないために。ここで中断できません。(岩渕宣輝)